

受験番号

答えは、解答用紙に書きなさい。また、字数制限のあるものは句読点・記号もふくみます。

(一) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(本文には、省いたり表記を改めたりした所があります。)

いまから5秒でけつこうですので、タンポポを心のなかで想像してみてください。  
さて、いかがでしょうか？

きつと「地面から顔を出した鮮やかな黄色の花」を思い浮かべた人がほとんどではないかと思えます。

しかしじつは、それはタンポポのほんの一部にすぎません。

もう少し想像を膨らませて、地面のなかを覗いてみましょう。

地中には、タンポポの根が伸びています。それは、まるでゴボウのように真つ直ぐで太く、目を疑うほど長く続いています。ものによつては、なんと1メートルに及ぶことすらあるのだとか……。

もうちょっと別の角度でも見てみましょう。

タンポポが花を咲かせている期間は、1年間のうちどれくらいなのかをご存知ですか？

いつでも道端に咲いているような印象もありますが、1つの花が姿を見せるのは、1年のうちなんと「たった1週間程度」です。

春先に短い開花時期を終えたタンポポは、すぐに一度しぼんで、約1カ月後、綿毛に変身を遂げます。春の終わりに綿毛を飛ばし終えると、夏には根だけになって、地上からはすっかり姿を消してしまうのです。秋が来ると葉だけを地上に出し、そのまま冬を越します。

そう、あなたが思い浮かべた「黄色い花を咲かせたタンポポ」は、さまざまに姿を変える大きな植物の「ほんの一部・一瞬を切り取ったもの」でしかありません。

空間的にも時間的にも、タンポポという植物の大半を占めているのは、じつは目には見えていない「地下」の部分なのです。

「アート」というのは、このタンポポに似ています。そこで、①アートを「植物」にたとえてみたいと思います。少々長めのたとえ話になりますが、どうぞおつき合ってください。

「アートという植物」は、タンポポのそれとも違う、aフシギな形をしています。

まず、地表部分には花が咲いています。これはアートの「作品」にあたります。

この花の色や形には、規則性や共通項がなく、じつに多様です。大ぶりで奇抜なものもあれば、小さくて目立たないものもあります。

しかし、どの花にも共通しているのは、まるで朝露に濡れているかのように、生き生きと光り輝いていることです。

本書ではこの花を「表現の花」と呼ぶことにしましょう。

この植物の根元には、大きな丸いタネがあります。拳ほどの大きさで、7色が入り混じったふしぎな色をしています。

このタネのなかには、「興味」や「好奇心」「疑問」が詰まっています。

アート活動の源となるこのタネは、「興味のタネ」と呼びたいと思います。

さて、この「興味のタネ」からは無数の根が生えています。②四方八方に向かって伸びる巨大な根はbアツカンです。

複雑に絡み合い結合しながら、なんの脈絡もなく広がっているように見えますが、じつのところ、これらは地中深くで1つにつながっています。

これが「探究の根」です。この根は、アート作品が生み出されるまでの長い探究の過程を示しています。

「アートという植物」は、「表現の花」「興味のタネ」「探究の根」の3つからできています。

しかし、タンポポのときと同様、空間的にも時間的にもこの植物の大部分を占めるのは、目に見える「表現の花」ではなく、地表に顔を出さない「探究の根」の部分です。

受験番号

アートにとって本質的なのは、作品が生み出されるまでの過程のほうなのです。

したがって、「美術」の授業で依然として行われている「絵を描く」「ものをつくる」「作品の知識を得る」という教育は、アートという植物のごく一部である「【A】」にしか焦点をあてていないこととなります。

美術館などでアート作品を見ても、「よくわからない」「『きれい』『すごい』としかいえない」「どこかで見聞きしたウンチクを語ることしかできない」という悩みを耳にしますが、それは、日本の教育が「探究の根」を伸ばすことをないがしろにしてきたからなのかもしれません。

どんなに上手に絵が描けたとしても、どんなに手先がcキヨウで精巧な作品がつくれても、どんなに斬新なデザインを生み出すことができて、それもあくまで「【B】」の話です。「【C】」がなければ、「花」はすぐに萎れてしまいます。作品だけでは、本当の意味でのアートとは呼べないのです。

「アートという植物」のdセイタイを、もう少しよく見てみましょう。

この植物が養分にするのは、自分自身の内部に眠る興味や、個人的な好奇心、疑問です。

アートという植物はこの「興味のタネ」からすべてがはじまります。ここから根が出てくるまでは、何日も、何カ月も、時には何年もかかることがあります。

このタネから生える「探究の根」は、決して1本とはかぎりませんし、好奇心の赴くまま好き勝手に伸びていきます。それぞれの根は、太さも、長さも、進む方向さえも違い、くねくねと不規則に波打ち、混沌としています。

「探究の根」はタネから送られる養分に身を委ね、長い時間をかけて地面のなかを伸びていきます。

アート活動を突き動かすのは、あくまでも「自分自身」なのです。他人が定めたゴールに向かって進むわけではありません。「アートという植物」が地下世界でじっくりとその根を伸ばしているあいだ、「地上」ではほかの人たちが次々ときれいな花を咲かせていきます。なかには人々をあつといわせるようなユニークな花や、誰もが称賛する見事な花もあります。

しかし、「アートという植物」は、地上の流行・批評・環境変化などをまったく気にかけません。それらとは無関係のところ、「地下世界の冒険」に夢中になっています。

ふしぎなことに、なんの脈絡もなく生えていた根たちは、あるときどこかで1つにつながります。それはまるで事前に計画されていたかのようにです。

そして、根がつながった瞬間、誰も予期していなかったようなタイミングで、突然「表現の花」が開花します。大きさも色も形もさまざまですが、地上にいるどの人がつくった花よりも、堂々と輝いています。

これが「アートという植物」のせいたいです。

この植物を育てることに一生を費やす人こそが「真のアーティスト」なのです。

とはいえ③アーティストは、花を咲かせることには、そんなに興味を持っていません。

むしろ、根があちこちに伸びていく様子が夢中になり、その過程を楽しんでいます。

アートという植物にとって、花は単なる結果でしかないことを知っているからです。

あと少しだけ、たとえ話を続けます。

世の中には、アーティストとして生きる人がいる一方、タネや根のない「花だけ」をつくる人たちがいます。本書では彼らを「④花職人」と呼ぶことにしましょう。

花職人がアーティストと決定的に違うのは、気づかないうちに「【D】」に向かって手を動かしているという点です。

彼らは、先人が生み出した花づくりの技術や花の知識を得るために、長い期間にわたって訓練を受けます。学校を卒業するとそれらを改善・改良し、再生産するために勤勉に働きはじめます。

花職人のなかには、立派な花をつくり上げたことで、高い評価を受ける人もいます。

受験番号

しかし、どんなに精巧な花であっても、まるで蠟細工のようにどこか生氣が感じられません。

たとえ花職人として成功を収めても、似たような花をより早く、精密につくり出す別の花職人が現れるのは時間の問題です。そういったとき、既存の花づくりの知識・技術しか持たない彼らには、打つ手がありません。

とはいえ、誰もが最初から花職人になることを志しているわけではありません。一度は自分の「興味の花ネ」から「探究の根」を伸ばそうと踏み出したものの、道半ばで花職人に転向する人も多くいます。

なぜなら、根を伸ばすには相当な時間と労力がかかるからです。「これをやっておけば花が咲く」という確証もありません。その間、周囲の花職人たちは美しい花をどんどん咲かせ、地上でそれなりの成功を収めていきます。ほとんどの人は、途中まで伸ばしかけた根を諦めて、花職人になる道を選びます。

「アーティスト」と「花職人」は、花を生み出しているという点で、外見的にはよく似ていますが、本質的にはまったく異なっています。

「興味の花ネ」を自分のなかに見つけ、「探究の根」をじっくりと伸ばし、あるときに独自の「表現の花」を咲かせる人——それが真正正銘のアーティストです。

粘り強く根を伸ばして花を咲かせた人は、いつしか季節が変わって一度地上から姿を消すことになっても、何度でも新しい「表現の花」を咲かせることができます。

「アートという植物」のお話におつき合いいただき、ありがとうございました。

少々長くなりましたが、アートやアーティストが「なんであるか／なんでないか」が、なんとなくおわかりいただけでしょうか？ 私がこのような比喻を持ち出したのには、2つの理由があります。1つは、あまりに多くの人が「アート＝アート作品」だと勘違いしているからです。いまお話ししたとおり、アートという営みにおいて、「作品」というのは地表に出ている花でしかありません。「表現の花」は最も目立つ部分ではありませんが、あくまでも一部分でしかないのです。

もう1つの理由は、本書のテーマである「アート思考」について、イメージをつかんでいただきたかったからです。

単純化していえば、アート思考というのは、アートという植物のうちの地中部分、つまり「興味の花ネ」から「探究の根」にあたります。ちよつとかしこまった定義をするなら、アート思考とは「自分の内側にある興味をもとに自分のものの見方で世界をとらえ、自分なりの探究を続けること」だといえるでしょう。(略)

ダ・ヴィンチはルネサンス期にイタリアで活躍した人物で、《モナ・リザ》の絵でよく知られています。1974年に東京国立博物館で開催された「モナ・リザ展」には、2カ月間でなんと150万人以上が駆けつけたといえますから、日本でも知らない人はいないといつていいレベルの偉人です。

ここで改めて宣言するのもおかしいのですが、⑤ダ・ヴィンチは真正正銘のアーティストです。

しかし、それはダ・ヴィンチが「超有名だから」ではありません。また、《モナ・リザ》をはじめとする彼の作品が卓越した描画力で美しく描かれているからではありません。

ダ・ヴィンチがアーティストであるといえるのは、彼が自分の「興味の花ネ」に忠実に従い、「探究の根」を伸ばすことで、「表現の花」を見事に咲かせ、「アートという植物」を育て上げた典型的な人物だからです。

ダ・ヴィンチの「興味の花ネ」は、「目に見えるものすべてを把握する」ということにありました。彼は、師匠から教わった絵の描き方や、書物にある知識には満足できませんでした。だからこそ、自分の目と手を使って自然界を徹底的に観察し、あらゆる事象を理解しようとしたのです。

「なんで海は青いの?」「雲の上はどうなっているの?」「と自由奔放な疑問を投げかけて大人を困らせる小さな子どものように、ダ・ヴィンチは興味の花ネを伸ばしていきました。

その「探究の根」はアートの領域に留まらず、科学の分野へも横断します。彼は、30体以上の人体を解剖し、膨大な数のスケッチ

受験番号

と研究で人体の構造を探りました。また、ライト兄弟が飛行機を発明する4世紀も前に、昆虫や鳥の飛行原理の分析に没頭し、ガリレオの地動説以前に、「太陽は動かない」という言葉を自身の研究ノートに記しているというから驚きです。

彼がやっていたのは、まさに「自分の内側にある興味をもとに自分のものの見方で世界をとらえ、自分なりの探究を続ける」というアート思考のプロセスそのものです。

ダ・ヴィンチのモチベーションは「表現の花」を咲かせることよりも、「探究の根」を伸ばす地下世界の冒険のほうにありました。それゆえ、7000ページ以上にも及ぶスケッチや研究があるにもかかわらず、完全に仕上げた絵画作品は生涯でたったの9点ほどともいわれています。

しかし「モナ・リザ」をはじめとする彼の「表現の花」は、500年以上経ったいまでも独自の輝きを放ち、世界中の人々に影響を与えています。(末永幸歩『「自分だけの答え」が見つかる 13歳からのアート思考』)

問一 —— 線 a d のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 線 ① 「アート」を『植物』にたとえてみたい」とありますが、このたとえについて、次のように説明しました。空らんに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でぬき出して答えなさい。ただし、空らんイは最初と最後の五字を答えなさい。

アートにおける「作品」にあたるのは、「植物」における「花」だ。多様な「花」は人それぞれに異なるが（ア 十二字）ことが特徴である。この「花」は（イ 二十四字）にあたる「タネ」から生まれる。この地中の「タネ」から伸びる「根」が、アート作品が生み出される（ウ 七字）を示すものである。

問三 —— 線 ② 「四方八方」のように、数字を二つ含む四字熟語の使い方として、まちがっているものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「七転八倒」…受験勉強と卒業式の準備で、七転八倒の毎日だった。  
 イ 「三寒四温」…三寒四温の気候から、段々と春の訪れを感じられる。  
 ウ 「一日千秋」…合格通知が届く日を、「一日千秋の思いで待っていた」。  
 エ 「一期一会」…新しいクラスメイトとの一期一会を楽しみにしている。

問四 本文中の「A」「B」「C」に入る最もふさわしいことばを、それぞれ選び、記号で答えなさい。(同じ記号を何度選んでもかまいません。)

- ア 花 イ タネ ウ 根

問五 —— 線 ③ 「アーティストは、花を咲かせることには、そんなに興味を持っていません」とありますが、これを次のように説明しました。空らんに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でぬき出して答えなさい。

アーティストはアート作品を（ア 五字）に過ぎないととらえている。そのため、作品を完成させるよりも、世の中の（イ 十字）などとは無関係なところで、（ウ 二字）していく、その（エ 二字）こそが、アーティストにとっての楽しみである。

受験番号

問六 — 線④「花職人」とありますが、これについて、次の問いに答えなさい。

1 「D」に入ることばを十字以内で、本文中の—線④より前の部分からぬき出して答えなさい。

2 「花職人」について説明したものととして、最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 花職人と呼ばれる人たちは、周囲の人間からの高い評価を受け取ることができるが、彼らに要求されるのは大量に生産する能力でありオリジナリティは必要とされていない。

イ 花職人と呼ばれる人たちは、アートを通じて自己表現を追求していたが、他者とは異なる魅力みりよくを持った作品を作ることができないためにアーティストの道へ進む権利を持たない。

ウ 花職人と呼ばれる人たちは、すでに存在する知識や技術を高いレベルで習得しているが、作品自体ではなく自分の努力そのものの評価を求めているため満足することがない。

エ 花職人と呼ばれる人たちは、作品を生み出すための訓練や研究のために努力を惜おしむことはないが、誰のまねでもない個性的な作品を生み出すことができない。

問七 — 線⑤「ダ・ヴィンチは真正正銘のアーティストです」とありますが、このことを次のように説明しました。空らんに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でぬき出して答えなさい。ただし、空らんアは最初と最後の五字を答えなさい。

ダ・ヴィンチは、本文のテーマであるアート思考を持つ代表的なアーティストだ。彼は、（ア 三十〜三十五字）とすることを原動力にして、アートや科学の領域へ探究を進めていた。完成させた絵画作品よりも、（イ 七〜九字）というプロセスを示すものの多さが、彼がアート思考を持っていることを示している。

問八 本文に書かれている「アート思考」について説明したものととして、最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 日常の中から、美しいものを見つけ出そうと考えていることが「アート思考」である。自分の持つ興味や関心をそのまま自分自身の探究活動の原動力とすることができるのがアーティストだ。

イ 自分自身の考えや思いを、作品を通じて周囲に広げようと考えていることが「アート思考」である。色鮮やかで生命力にあふれたものをどのようにして生み出すかの探究を続けるのがアーティストだ。

ウ 自分の興味や関心の赴くままに、その好奇心を満たしたいという思いを探究の動機と考えていることが「アート思考」である。作品の完成や周囲からの評価を目的としないのがアーティストだ。

エ 作品を生み出すまでのプロセスに対して、周囲からされる評価にこそ価値があるのだと考えていることが「アート思考」である。作品の完成それ自体には意味がないと認識しているのがアーティストだ。

受験番号

(二) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小さなおもちゃ屋である。

むかしは駄菓子屋とか一文店とか呼ばれていたが、駄菓子はとうから売らなくなった。そのかわりに、せまい店をなおせまくして棚をつり、そこにつまめたプラモデルの箱も、あまり売れているようではない。

売り台にならべられたものは、小さな人形、ままごとセット、砂遊びのスコップ、花火に水鉄砲。ミニカーにジグソーパズル。

そして——しゃぼん玉。

試験管のような細長いプラスチックの入れものに、とろりとした半透明の液体が口までつまつて、小さなストローをそえてある①このしゃぼん玉が、少女は大好きだった。

硬貨をにぎつてかけてくると、まずひとわたり店内を見まわす。男の子のプラモデルに用はない。着せかえ衣装つきのリカちゃん人形は、もうとつくにあきらめた。ビーズやリアンや、ビニールのaユビワもほしいけれど、またこんどにしよう……。そのつど、

②儀式のようにひとつひとつの品物をbテンケンしながら、結局のところ、少女が買うものは(A)きまつているのだった。

——しゃぼん玉、ください。

奥へ声をかけると、腰のまがりかけたおばあさんが、③大儀そうに出てきて、だまったまま、しゃぼん玉の箱をさぐる。その段ボールの小さい箱のすみっこに、ひとつだけ、妙なかたちのびんが立っていた。うす緑色のガラスびんで、ひょうたんのようにまん中のくびれた胴体の上に、帽子みたいに大きな栓がのっている。

しゃぼん玉の箱の中にあるのだから、そのびんの中も、やはりしゃぼん玉なのだろうが、ふだん買うのとちがって、こっちはずいぶん高いのだろう。あのびんの中身を吹けば、いつもとはまるつきりちがう、すばらしいしゃぼん玉ができるのにちがいないと、少女は思った。

いくらなのか、聞くだけでも聞いてみようと思ひながら、④いつも気おくれしてしまふ。しゃぼん玉をわたし、お金を受けとるだけで、めつたに口をきかないおばあさんには、こちらからも口をききにくかった。

しかし、店を一步出ると、そんなことはもうどうでもよくなる。買ったしゃぼん玉のびんをにぎりしめ、かけだして家へ帰ると、すぐに小さな庭へ出て、柿の木の下でふつぷと吹かす。こまかいあわの玉が、そのひとつひとつに小さなにじをはらみながら群れをなして舞いたち、まぶしい日光の中へ音もなく消えてゆく。少女はうっとりとしてそのゆくえをながめ、小さなにじをたやすまいと、なおもつづけざまにストローを吹く。

小さな入れものの中の液体は、(B)底をつき、少女はがっかりして、⑤みれんらしくびんをかたむける。最後のひとしずくまでストローに吸わせてひと吹きし、それで(C)あきらめて、からのcヨウキをすてにゆく。空のどこかに、まだ二つ三つ、しゃぼん玉のかけらがただよっていて、ときにきらきら光るのが、なみだが出るほどなつかしい。

ある日、いつものように、少女がしゃぼん玉を買いにいくと、奥から出てきたおばあさんが、箱をさぐる手をふとめて、小走りに店のまえへ出ていった。その目のまえを、郵便配達の赤い自転車が、すつととおりすぎる。そのあとを見おくれたおばあさんは、がっかりしたように店へもどってきて、いつものようにだまったまま、しゃぼん玉のびんをわたしよこした。

それから、少女が店へ行ったとき、二、三回つづけてそんなことがあった。

——おばあさんは、どこかからの手紙を待ってるんだな。

と少女は思う。なんだか、なかなかとどかないその手紙が、おばあさんの無口の原因であるような気がする。

家へ帰つてそのことを話すと、母親もくびをかしげた。

——きつと、むすこさんからの手紙を待ってるんじゃないかしらね。むすこさん、学校を終えたとすぐ、東京へ働きに出て、もうあつちでおよめさんもらったんだって。おばあさんは、こつちへ帰つてこいつて言うんだそうだけど、むすこさんだつて勤めのつごう

受験番号

もあるだろうしねえ。

——ふうん。でも、手紙くらいだせばいいのにね。

——手紙はどうか知らないけど、やつぱりむすこさんだつて、おばあさんをひとりでおいとくのは心配だから、東京へ来ていっしょに暮らそうつて、いつも言ってるそうよ。

——おばあさん、東京へ行くかしら。

——さあねえ。長年住みなれたところをはなれるのは、おばあさんも、さびしいだろうからねえ。

おばあさんが東京へ行ってしまえば、あのお店もなくなるだろう。あの、うす緑色のびんにはいつているしゃぼん玉は、どうなるのかしら。

——あ、そうだ！

少女はきゆうに思いだす。もうすぐ、町のお祭りだ。お祭りになれば、おこづかいをすこし余分にもらえる。それで買えるかどうか、こんどこそ思いきって聞いてみよう。

しかし、少女がいきおいこんでおもちや屋へかけつけると、めあてのひょうたん形のびんは、段ボールの箱から姿を消していた。

——はて、おかしいねえ。いいえ、売れやしなかったよ。そういえば、さっきこのへんをかたづけたから、そのとき、どこかへころげて落ちたかね。

ぶつぶつとそんなことをつぶやいているおばあさんといっしょに、そのあたりをさがしまわると、しゃぼん玉の箱と、そのうしろの箱とのちよつとしたすきまに、あのうす緑色のびんが横だおしになっていた。

——あつた、あつた。

すぐ手をのばすと、その箱の下から、なにか白いものがのぞいている。なんだろう、とつまみあげてみると、それは、ほこりにまみれた一通の封筒ふうとうだった。

——あら、おばあさん、こんなところにお手紙が落ちてる。

かざして見せると、いつもねむっているようなおばあさんの目が、きゆうに大きく見ひらかれた。そして、まるでおそるおそるのようにならぬ封筒を受けとると、はさみでもさがすのか、ちよつとろうろしていたが、そのまま奥へかけこんで、いつまでたってもどつてこない。呼んでも、返事がない。少女はしばらく待ったが、しかたなくそのまま家へ帰った。

あくる日から三日間、小さなおもちや屋はめずらしく店を休んだ。ガラス戸にはべつに貼り紙がみもない。カーテンだけがひっそりともまっている。

四日めに、少女が学校から帰ってくると、母親が思いがけない知らせを聞かせてくれた。

——おもちや屋のおばあさんね。やつぱり、東京のむすこさんのところへ行つて、いっしょに暮らすことにしたんだつて。

東京へ行く行かない、帰ってくる来ないで争つて、しばらく仲たがいのようになっていたむすこのところへ、しばらくまえに、おばあさんが⑥折れて、そつちへ行つていっしょに住んでもいいか、と手紙をだした。その返事が、なかなか来ない。もうむすこにすてられたのかと、ふさぎこんでいたところへ、店の品物のあいだにまぎれこんでいた東京からの手紙が見つかった。郵便配達の人が箱の上へおいていったのを感じがず、箱をうごかしたはずみにずれ落ちてしまったらしい。

手紙には、すぐにでも東京へ出てくるように、日がまればむかえにいく、とあつた。おばあさんはすっかりよろこんで、さつそく店をたたみ、むすこのところへうつることにしたという。

きょうは店もあいていたというので、少女がすぐかけていってみると、⑦おばあさんは、うって変わった笑顔でむかえてくれた。

——このあいだは、ほんとにありがとうよ。この店も、もうしめるんだから、お礼に、なにか好きなものをあげるよ。なにがいいかねえ。

少女はためらわず、うす緑色のしゃぼん玉のびんを指した。

受験番号

— おや、こんなのでいいの。はて、これはいつ仕入れたのかねえ。ずいぶん古いようだから、なんともなっていないけりやいいが。  
— いいの、これ、まえからほしかったの。

少女は、うす緑色のびんをだきしめてとんで帰り、いつもの柿の木の下に立った。

ふくらむ、ふくらむ。いつもよりずっと大きいしゃぼん玉が。ゴムdフウセンほどにもふくらんで、しずかにストローのさきをはなれてゆく。そのしゃぼん玉に、ぽつと赤い灯がともる。(D)、お祭りのちようちんをつらねたように、そろってのぼってゆく、西空のまっかな夕やけの中へ。

⑧ それを目で追いながら、少女は、わすれていたことにふっと気がついて、思わずつぶやいた。

— あしたはお祭り、あした天気になあれ。(杉みき子『小さな町の風景』より「小さなおもちゃ屋」)

問一 — 線 a d のカタカナを、漢字に直しなさい。

問二 (A) ( ) (D) に入る、最もふさわしいことばを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません。)

ア とつくに イ まるで ウ やつと エ なかなか オ たちまち

問三 — 線①「このしゃぼん玉が、少女は大好きだった」とありますが、この後、このしゃぼん玉液で作ったしゃぼん玉に心をうばわれ、少女が次々と作り続ける様子を表した一文を、本文よりぬき出し、最初の十字を答えなさい。

問四 — 線②「儀式のように」とありますが、これは少女のどのような様子を表現していますか。最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

ア 儀式を決まった作法に従って取り行うように、おもちゃ屋での買い物の際には、そのたびにきまってあらゆるおもちゃを眺めて品定めした上で、しゃぼん玉を選ぶ様子。

イ 儀式をおごそかな気持ちで取り行うように、おもちゃ屋での買い物の際には、いつも真剣におもちゃの価格や優先順位が実用性を考えた上で、しゃぼん玉を選ぶ様子。

ウ 儀式をふだんよりも華やかな雰囲気を取り行うように、おもちゃ屋での買い物の際には常に華やかで美しいおもちゃばかりをよく見比べた上で、しゃぼん玉を選ぶ様子。

エ 儀式を長々と時間をかけて取り行うように、おもちゃ屋の買い物の際には毎回延々と時間をかけて様々なおもちゃに不備がないか目を通したうえで、しゃぼん玉を選ぶ様子。

問五 — 線③⑤⑥のことばの意味として、最もふさわしいものを、次から選び、記号で答えなさい。

③ 「大儀そうに」 …… ア めんどろがる様子で イ おおげさな様子で

ウ いかにもいそがしい様子で エ かしこまった様子で

⑤ 「みれんらしく」 …… ア いかにも大切そうな様子で イ いかにも不満がある様子で

ウ いかにもあきらめられない様子で エ いかにも悲しそうな様子で

⑥ 「折れて」 …… ア はなはだしく気落ちして イ 急に体調をくずして

ウ ずいぶん苦勞させられて エ 相手の言い分に従って

受験番号

問六 — 線④「いつも気おくれしてしまう」を、次のように説明しました。空らんアに入る、最もふさわしいことばを、本文より二字でぬき出して答えなさい。また空らんイに入る、最もふさわしい内容を、後の番号から選びなさい。

おもちゃ屋のおばあさんは（ア）なので、（イ）ということ。

- 1 うす緑色のびんに入ったしゃぼん玉の中身のことを聞くことができず、リカちゃん人形と同様に、あきらめなければならぬので、いつもがっかりして力がぬけてしまう
- 2 うす緑色のびんに入ったしゃぼん玉の値段は聞くこともできないし、ふだん買うしゃぼん玉よりも高価に違いなく、どうせ聞いても買えないと、いつも思ってたあきらめてしまう
- 3 うす緑色のびんに入ったしゃぼん玉のことを聞きたいが、おばあさんは答えてくれないことがわかりきっているので、いつも遠慮してしまう
- 4 うす緑色のびんに入ったしゃぼん玉がいくらなのか、おばあさんに聞くとは思わなかったが、わざわざ声をかけてたずねようとしても、いつも心がひるんでしまう

問七 — 線⑦「おばあさんは、うって変わった笑顔でむかえてくれた」とありますが、なぜおばあさんは笑顔でむかえてくれたのですか。その理由を説明した、次の文の空らんに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でぬき出して答えなさい。

おばあさんは、（ア 四字）していたむすこに、東京に行くとき手紙を送ったにもかかわらず、なかなかその返事が届かなかったため、（イ 九字）ように思えて落ちこんで、店番をしていたが、実はすでに届いていたむすこからの手紙を、店の箱の間から見つけ、その手紙を読んで、（ウ 十五〜二十字）を決め、晴れやかな気持ちになったから。

問八 — 線⑧「それを目で追いながら…」とありますが、この部分とこの部分に至るまでの、少女の心情・様子を、次のように説明しました。空らんに入る、最もふさわしいことばを、本文より指定された字数でぬき出して答えなさい。

以前から少女は、（ア 五字以内）になると、おこづかいでうす緑のびんのしゃぼん玉が買えるかもしれないと期待していたことがあったが、店が三日間休みだったので、その値段を聞けないままだった。その後、少女は、自分が手紙を見つけたことで、おばあさんを喜ばせたのが、うれしくて（ア）のことを忘れていた。ところが、おばあさんにもらった緑色のびんの液で作った、いつものよりずっと大きい（イ 五字以内）に（ウ 五字以内）が映り、（エ 七〜十字）のようにのぼっていく姿を見て、（ア）を思い出し、幸せな気持ちでいっぱいになり、さらに明日からのことにも期待に胸をふくらませる少女の様子が描かれている。

問九 「うす緑色のびん」の役割について説明した内容として、正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「うす緑色のびん」は、本来必要ではなく、単に少女がしゃぼん玉を好きだということを示しているだけの小道具である。
- イ 「うす緑色のびん」は、おもちゃ屋になくはならないもので、おもちゃ屋というのは新しいものから古いものまである場所だということを表現している。
- ウ 「うす緑色のびん」は、目立たない位置から事のなりゆきを見守り、この世のすべての人にしあわせをもたらすという、大切な働きをしている。

エ 「うす緑色のびん」は、少女が、息子からの手紙を見つけ出すというきっかけを作っているという点で重要な働きをしている。

受験番号

問十 本文に見られる表現の特徴や工夫について、五人の小学生が話し合っています。誤りをふくむ発言を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「冒頭のおもちや屋の描写はわくわくするよね。いかにもこじんまりとした店構えが想像できるし、売り台の上にある、さまざまなおもちやが具体的に列挙されているから、イメージが鮮明に浮かんでくるなあ。」

イ 「しゃぼん玉の入ったうす緑色のガラスびんについては、その形状を『ひょうたん』や『帽子』にたとえて、表現しているのがおもしろいよね。」

ウ 「本文はかぎかっこではなく「――」を用いて会話文であることを表現しているよね。おばあさんの言葉数は、そんなに多くはないけれど、『がっかりしたように』ふるまったり、封筒を見て、『目が、きゆうに大きく見ひらかれた』り、実は、おばあさんの表情には感情が豊かに表れているよ。」

エ 「私は、登場人物に名前がついていないことが気になっているの。『少女』では、何者なのかわからなくて現実味が乏しい気もするけれど、その分、読者がこの人物がどんな人なのかを想像する余地が残っているよね。」

オ 「色彩の豊かさもこの小説を魅力的にしているよ。うす緑色のびん、『にじ』の色を浮かべたしゃぼん玉に、赤い自転車、白い封筒、最後の場面のまっかな夕焼け……。色が登場するのはきまって少女がとても明るくはずんだ気持ちのときだけで、見える世界までカラフルで楽しそうだね。」

